

介護してもらわなければならない辛さにもじまっていた。その後も同様の言動はしばらく続き、妻は懸命に耐えているようであった。われわれは訪問看護師や介護支援専門員などとチームを組み、頻回の訪問を心がけた。痛みや呼吸困難感は医療用麻薬の服用にて何とかしのげていたが、喘鳴が増強するなど容体は急激に悪化、訪問診療開始から2週間ほどで永眠した。

### 〈喪失感表出の意味〉

Aさんは半身不随となり、ベッド上から動くことができなくなり、その辛さを再三訴えていた。そしてそのもどかしさ、怒りの矛先を妻に向けていた。彼は化学療法を受ける際は担当医と十分相談を繰り返し、疼痛に対して鎮痛剤を使用する際にも説明を受けており、容態の変化も十分理解はしていたと思われるが、身体機能が失われ、自分のことが自分でできなくなったことへの辛さと他人へ依存することの辛さを表現していたのだろう。

自立性の喪失  
による痛み

村田<sup>3)</sup>は、がん患者のこの自立性の喪失による痛みを、過去と将来に支えられて生きてきたが近く将来を失うことになる時間存在である人間の痛みや、他者との関係が失われるために生じる関係存在である人間の痛みとともに、スピリチュアルペインの構成要素として説明している。自律存在の人間が自立と生産性、さらには人の役に立たなくなるなどの機能を失うための痛みであると述べている。何もできなくなることによって自律性、能動性、さらには生産性も失われ、自分のこともできなくなり、身の周りの世話を他人に依存し、自分をさらけ出さなければならず（私秘性の喪失）、その負担と迷惑をかけることに苦しむことになる。Aさんの訴えはもっぱら自律存在である人間の痛みであった。

訪問診療を始めてから、在宅療養を選択した患者にはむしろ「喪失感」を示さない例が多いと感じている。もちろん病院治療から在宅療養に移行し、

### 【用語解説】

#### • DNAR

「DNRとは尊厳死の概念に相通じるもので、癌の末期、老衰、救命の可能性がない患者などで、本人または家族の希望で心肺蘇生法（CPR）を行わないこと」、「これに基づいて医師が指示する場合をDNR指示（do not resuscitation order）」というとの定義が示されている。しかしDNRが蘇生する可能性が高いのに蘇生治療は施行しないとの印象をもたれやすいとの考えから、attemptを加え、蘇生に成功することがそう多く

ないなかで蘇生のための処置を試みない用語としてDNAR（do not attempt resuscitation）が使用されている。

（日本救急医学会ホームページ<sup>参考URL<sup>1)</sup></sup>より一部抜粋）

#### • 在宅緩和ケア

単なる在宅ケアでは家に帰ってからも痛みなどで苦しむ可能性があるため、家でも緩和ケアを提供できる在宅ケアの体制。